

校長研修だより2

社会性の基礎となる「自己有用感」

～「自尊感情」？それとも「自己有用感」？～ 2021・4・16 重枝 一郎

「自尊感情」は、自己に対して肯定的な評価を抱いている状態を指す self-esteem の日本語訳である。自分に自信が持てず、人間関係に不安を感じていたりする状況が多くの子供に見られるので、生徒の「自尊感情」を高めることが必要と言われる。

しかしながら、日本では、生徒の「規範意識（きまりを進んで守ろうとする意識）」の重要性も言われる。それらを併せて考えるなら「自尊感情」よりも「自己有用感」の育成を目指すほうが適当と言える。

なぜなら、人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という「自己有用感」は、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価だからである。

つまり、日本の生徒の場合には、他者からの評価が大きく影響する。また、「ほめて（自信を持たせて）育てる」という発想よりも「認められて（自信をもって）育つ」という発想のほうが生徒の自信が持続しやすい。

もう少し詳しく言うと、「自尊感情」とは自分に対する自己評価が中心である。元々は self-esteem とは、自尊心、プライド、うぬぼれ・・・などの訳語になる。プラスもマイナスも含んだ中立的な語である。「自尊感情」を高めるべく大人が生徒をほめる機会を増やしても、必ずしも好ましい結果をもたらすとはいえないのも事実である。そもそもほめる以前に叱ったり、行動を改めさせたりすることは当然ある。また、大人がほめることで自信をつけさせることができたとしても、実力以上に過大評価してしまったり、周りの友達からの評価を得られずに元に戻ってしまったり、自他の評価のギャップにストレスを感じるようになり、ということが起こる。

それに対して、「自己有用感」は、他者の役に立った、他者に喜んでもらった・・・など、相手の存在なしには生まれてこない点で、「自尊感情」や「自己肯定感」とは異なる。つまり、自分に対する他者の評価が中心ということである。最終的には自己評価であるとしても、他者からの評価やまなざしを強く感じた上でなされるという点がポイントになる。この学校では「神様からのまなざし」という視点もある。単に「クラスで一番足が速い」という自信ではなく、「クラスで一番足が速いので、クラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えられるようになりたい」という形の自信である。その意味では、「クラスで一番」かどうかは、さほど重要ではなくなっているとさえ言える。実は、「自己有用感」の獲得が「自尊感情」の獲得につながる。しかしながら「自尊感情」が高いことは、必ずしも「自己有用感」の高さを意味しない。そして、他者の存在を前提としない自己評価は、社会性に結びつかない。

学校という人が集まる場所では、誰かの役に立つことができたという集団の一員としての自信や誇りの獲得が課題になる。